

No.145

2004.
7.31

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111
振替名古屋637909

美術館の評価とは？

岐阜県博物館協会常任理事

岐阜県美術館館長 古川 秀昭



昨年10月から岐阜県美術館がニューヨークのメトロポリタン美術館との共催展「織部」を開催し、国宝、重要文化財を含む約110点の作品返却を終えたのは今年2月半ばでした。

1998年から準備を始めたので、あしかけ6年を費やした大事業ということでしょう。私はこの展覧会の担当者の一人として、その意義は計り知れない大きな意味内容を持つものと信じています。

しかし一方、私たち岐阜県民の一億を超す税金を注いで、一体どのようなプラス面があるのか、という問いも聞こえてきました。

最近、美術館や博物館に対する「評価」が話題になっています。美術館博物館の評価とは何を基準とするのでしょうか。経費とそれに対する効果といった経済的な評価から、そもそも美術館や博物館は存在しなくても生活面に支障はきたさないものだ、といった美術館不用論まであります。反面人間が生きる中にそのような数値化できない文化施設の価値を説く運きもでてきました。

織部展もある見方では、世界の政治経済文化の中心都市ニューヨークで、日本文化史上の分岐点となった「織部」の様相を伝え、その「Oribe」の音をニューヨークに響かせた功績は、国の事業でもできないことで、その効果は10億円とも20億円をも越えるものともいわれています。

岐阜県美術館としては、この織部展の準備中にアメリカで日本美術の優れたコレクションとして知られる「パークコレクション」展を2005年の愛知万博期に岐阜県美術館で開催する交渉に成功しました。このような目前の成果は挙げやすいのですが、メトロポリタン美術館と共催した実績は、今後の美術館の企画力や人的及び作品交流面で豊かな学芸的財産となるものです。このように将来への評価をどう表すかも大切な視点でしょう。

まだまだ評価の視点は広げなければなりません。例えば2年前、岐阜県美術館の開館20周年記念で「ルドン展」を開催しましたが、この展覧会に対して、文化庁が展覧会終了後に2300万円の助成金を出しました。また今秋開催予定の「熊谷守一展」には500万円の支援を受けます。話は織部展に戻りますが、「織部」の内容が現地のニューヨークタイムズ紙に全面カラーで詳しく報道されたこと、現地の教授が会期中に6回見に来たことなども、評価に表れていいでしょう。

美術館など文化施設の内外部の「評価」は今後ますます運営上の大切な要素になるでしょう。だからこそ「評価基準」が整備されなければなりません。入場者数は当然わかりやすい評価数字です。しかし入場者数が少ないとわかった上で、やらなければならない、知られざる作家や重要な新たな情報を紹介する展覧会だってあります。リピーターの多いことも大切なポイントです。

学芸員（美術館博物館）と入館者が互いに文化的緊張関係を高め合いつつ、いきいきした展示とその評価を交わしあえる美術館運営を展開したいと願っています。

第58回岐阜県博物館協会会員研修会報告

期 日：平成16年6月29日（火）13時～16時30分

場 所：関市役所北庁舎6階会議室

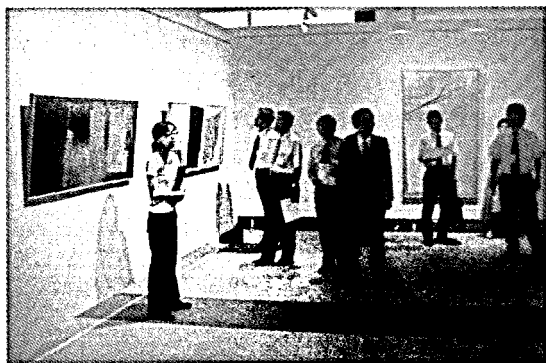
参加者：24名

研修内容

（研修Ⅰ）関市立篠田桃紅美術空間に関する
講話と見学

講師：中島寛恵氏（同館学芸員）

関市立篠田桃紅美術空間は、日本が誇る美術家篠田桃紅の作品を展示する空間として2003年5月に関市役所7階に開設されたものです。父親が岐阜市出身、祖母が関市出身であり、また幼いころより美濃紙に愛着をもたれ、地元にとりわけ関わりの大変深い方です。



展示室は1室の単純な構成ですが、中央の二つの展示壁面を回転することで、多様な展示が可能となり、東西の壁と床を土塗りとして柔らかな空間に仕上げています。

今回は開館1周年を迎え、第4回企画展開催中にて、桃紅の2000年前後の近作を中心に、墨色だけでなく、朱色を画面に遊ばせた作品や、今回初公開となる版画作品（リトグラフ）の展示様々な形や素材の作品、今も変化し続ける桃紅の創造のものがたり、線と面、空間の交わり、緊張感と静寂を生み出して居ります。又、他の美術館と違い、展示にキャプションはなくスポットのみにて、見る人のマナーとその心にあると説明され、参加者一同時間一杯、熱心に見学しました。

（研修Ⅱ）関市池尻185番地 円空館と、弥勒寺遺跡群、見学の為バスにて移動
講師：篠原英政氏

（関市教育委員会文化課課長補佐）

関市内には今日迄に確認された円空仏は初期作より、晩年作迄約160体所蔵されて居り、円空終焉の地としてその足跡とともに円空を知る上には格好の地である。

関市にて円空館建設に至る迄の経過と共に弥勒寺遺跡群の発掘調査、国の指定史跡と併せて、円空像展示に対する多くの苦勞話、運営と維持、管理について、いろいろくわしく説明していただきました。続いて発掘展示の螺髪の説明や布目平瓦の作り方なども、楽しく教えていただきました。



（見学Ⅱ）

第4回展示品の円空像、その他円空関係展示品、弥勒寺遺跡の出土展示品を見学する。

（見学Ⅲ）

弥勒寺遺跡群は、関市池尻一帯に広がり、壬申の乱（672年）の後この地方の豪族だったムゲツ氏が朝廷の援助で建立したのが弥勒寺で、竹林を拓いて発掘された跡地には建物の土台と見られる石が矩形を描いて点在する。現地の説明と共に、古代に想いを馳せて、心ゆく迄、見学しました。

16時30分、今回の目的である会員の情報交換、研修、親睦を果して研修会を終り、散会しました。

（機関紙委員 日本土鈴館 遠山一男）

平成16年度東海地区博物館連絡協議会

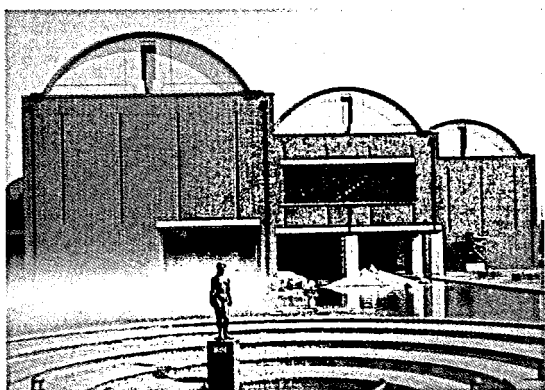
「日本博物館協会東海支部総会に出席して」

日 時：平成16年7月16日（金）～17日（土）

会 場：山梨県立美術館、山梨県立文学館

参 加：静岡、愛知、山梨、神奈川、岐阜の5県から55名(本県からは5名)

東海地区博物館連絡協議会の総会会場となった山梨県立美術館は、甲府駅から南西約4kmの「芸術文化の森公園 約6㉩」の中心にあり、ミレー作品の所蔵で知られ、山梨県立文学館、茶室「素心庵」とともに甲府地区の文化教育施設の拠点を形成している。



総会の席上、岐阜市歴史博物館長の白水正氏等に対して博物館功労者表彰が行われた。

来賓の山梨県教育長眞田良一様から、「景気の低迷、財政の悪化、市場原理の導入等々博物館を取り巻く環境が激変する中、文化財を収集、保存、調査、展示し、後世に伝える博物館の使命、機能は重要である。来秋には、県博物館をオープンする予定であり、山梨県としては、観光立県を目指して全国初の観光部を設置し、誘客に努めている。博物館等もその一翼が担えればと期待している。」との祝辞があった。

日本博物館協会専務理事の五十嵐 耕一様からは、「企業博物館の廃止、公立博物館の縮小、統合が進むなか、ボランティア、友の会活動の活発化やNPO法人化もみられる。今年11月の全国大会のテーマは「市民と共に創る博物館」としている。これからの博物館は、市民の多様なニーズに応え、市民と共に幅広い活動を展開する必要がある。」旨の報告がなされた。

また、前年度提起された博物館が抱える当面する課題について、静岡県博物館協会から、

観覧者の増加対策、学校及び地域との連携、財政基盤の充実方策について静岡県の博物館について実態調査をし、その結果について報告がなされた。

平成17年度の開催県は、神奈川県に決定された。

記念講演会では、昭和53年開館以来、目玉作品として展示してきたミレーの「種をまく人」等について、修復作業を担当された東京芸大大学院の木嶋助教授からの調査研究報告がされた。今回の修復は、山梨県立美術館が、展示室の増設の他ワークショップ、レストラン・カフェ、図書室を新設するため、工事期間中の休館期間を利用しての修復作業のため、十分な時間ではなかったが、X線、紫外線、赤外線撮影等により調査研究ができ、概ね所期の修復は達成できた。美術館のリニューアルとともに作品もリフレッシュでき、これにより名実ともに充実が図られた。



山梨県の文化教育施設では、リピーターの増加を図るため年間入館料が設定されている。因みに美術館の場合、大人が通常500円を年間では、3000円に 小中生は100円を年間750円と設定している。

なお、公園内には、無料の駐車場が、乗用車320台、バス20台確保されている。

また、館内では、多くのボランティアの方々が、作品の紹介、会場案内等々の活躍をされ館内サービスを担当されていた。

(岐阜県博物館協会事務局 松尾弘之助)

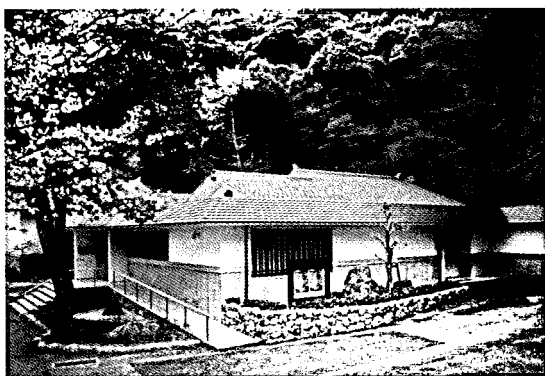
加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003

岐阜市大宮町1丁目46 (岐阜公園内)

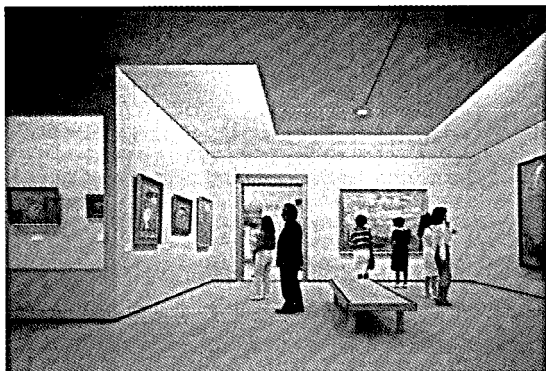
TEL&FAX : 058-264-6410

<http://www.city.gifu.gifu.jp/event/katoukinen>



加藤栄三・東一記念美術館は、岐阜市中心部にそびえる金華山の麓にある岐阜公園の中にあり、金華山ロープウェー山麓駅のすぐ北に建っています。吉村順三の設計による、こじんまりとした白壁土蔵造風の平屋建物は、ちょっと立ち寄って見るのにちょうどよい大きさと、清潔で親しみやすい雰囲気を持っています。

この美術館は、岐阜市出身の兄弟日本画家・加藤栄三(1906~1972)と東一(1916~1996)の画業を顕彰するとともに、市民の美術普及活動を充実させる目的で平成3年5月に開館しました。弟の東一画伯は、金閣寺大書院の障壁に薄墨桜と鶉の図を描いたことでもよく知られています。平成6年に財団から岐阜市へ移管され、同じ岐阜公園内にある岐阜市歴史博物館の分館となって今年でちょうど10年になりました。



館内は2つの展示室に分かれており、玄関のすぐ前から始まる第1展示室では、栄三・東一の作品を、館藏品を中心に年4回ほど展示替えしながら紹介しています。完成した作品だけでなくスケッチや下図などが展示されることも多く、作品が制作される過程を見ることができなのが魅力です。そして美術館建設の際に発掘調査された戦国時代頃のかまどを移築されたロビーを通り、第2展示室へとすすみます。こちらでは、岐阜で活躍する作家たちの作品を紹介する展覧会を年7回ほど開催しています。東一画伯の「地方の文化を支えているのは地方の作家たち。その作家たちを応援するような、常に動いている美術館にしよう」という想いを受け継ぎ、地域の美術館としての役割も果たしてきました。



白色を基調とし、明るい展示室は疲れを感じさせません。また、玄関ロビーと展示室の間のロビーの両方から望める中庭には、池と若い桜の木などの緑が静かにたたずむ、落ち着いた空間と時間を楽しめる場所です。

【交通】JR「岐阜駅」もしくは名鉄「新岐阜駅」から長良橋方面行きバスで「岐阜公園・歴史博物館前」下車(所要時間約15分) 徒歩約5分

【駐車場】岐阜公園堤外駐車場を利用、1時間以上一律300円

【開館時間】午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)

【休館日】毎週月曜日及び祝日の翌日

【入館料】高校生以上300円、小中学生150円

歴史博物館との共通観覧料：高校生以上500円、小中学生250円

(写真提供 加藤栄三・東一記念美術館/

機関紙委員 岐阜市歴史博物館 稲川由利子)